

「当事者としての自覚」 天野絵梨香

今回中国を訪れて、一番強く感じたのは、これからの日中の友好関係は私たちが築いていくものなのだとことです。そして、これからの世界も、私たちが作り上げていくものなのだとことです。

中国に対するイメージで、日本で爆買いをする中国人の姿や、環境汚染で空気が汚いことが挙げられることがありますが、これらは少し前のことで、現在の中国の姿は実際どうなのか、中国に行く前はあまり想像できていませんでした。実際に行ってみると、食事をしたレストランで働いていた人も、大学で会った学生も、ショッピングモールの店員も、やさしい人が多かったように思いました。私はこれまで、多くの中国人と関わったことはあまりなかったため、今回、交流大会などで日本と中国の学生がお互いに発表し合ったり、一緒に歌を歌ったりしているのを見て、国が違うからといって、何か特別な優越はなく、対等な人と人同士なのだと改めて感じる事ができました。中国の街並みは、整っているところはとても整っていて、発展しているのだと感じました。夜も光が多くてきれいでした。しかし、少し郊外に出てみると、そうでもない場所もあって、都市部との差が意外とあるのだなと思いました。日本でも、中国でも、何かと問題はあっても、その問題点が何かを考え、その解決のために行動するのは、大人のだけかではなく、これからの私たちなのだろうと、バスから見えた景色を見て思いました。

同じ班のメンバーは、それぞれ国内外で様々な活動をしていました。誰かを見下すためや能力を見せつけるためではなく、各々のなりたい姿や、目指したい社会のために、真っすぐ、いきいきと行動しているメンバーに、とても刺激を受けました。私はまだ大人にはなりきれていないと感じていましたが、いつまでも大人に頼ってばかりいられるわけではなく、これからは、自らコミュニティを広げ、友好を深め、一緒に良い社会にしようと言ひ合える関係を築いていきたいと思いました。そして、その関係は、国内にとどまらず、中国や世界の人々との友好関係へと広げていきたいです。また、お互いの持つ文化や考えについて語り合い、尊重し合える関係になれるように、もっと中国語の勉強を頑張りたいと思いました。IA班には、中国語の勉強を頑張っている人がたくさんいたので、彼らのように、私もより一層力を入れていきたいです。言葉の壁はあるものなのかもしれませんが、文化や考え方などと違って、努力次第で乗り越えることができるものだと思うので、近い将来、中国人と語り合うことができるように、努めていきたいと思っています。

意識はしていても、どこか遠いところにあるように思っていた「日中友好」ですが、実際に中国に行き、現地の人や文化に出会ったことで、当事者として「日中友好」について考えることができるようになりました。そして、もっと私の持っている想いが伝わるように話せるようになりたい、もっと一人の人間として自信をもって、社会に貢献できる人になりたいなどといった向上心を得ることができました。今回の訪中団での出会いや経験を大切に、これから、素敵な仲間とともに、素敵な世界にしていけるよう精進したいと思います。

「大学生訪中団を終えて」 飯沢桜子

人生で三度目となる今回の訪中の目的は、「国家レベルの友好関係に触れること」だった。少なくとも同世代の日本人学生よりは中国についてプラスのイメージを持っているし、偏見もあまり無かった。その上で今回の訪中団を通じ、異文化交流について気づいたことが二つある。

一つ目は、相手に自国の言葉が話してもらえると嬉しいということだ。訪中する中で、中国人の大人、日本人の大人が壇上で挨拶をする機会が多く見受けられたが、中国人の方の演説では最後の「ありがとうございました」という言葉が最も印象に残った。またその言葉を聞いた瞬間に顔が緩み、会場の日本人側の空気も緩んだと感じた。

そして二つ目は、表情は世界共通であるということだ。言葉が伝わらないのならば、表情を大事にすべきである。万里の長城の売店で、私はパンダのぬいぐるみを購入した。そこで同じ物を選んでいて中国人の少年と目が合ったので、自然と微笑みかけた。すると恐らく同じだねと心が通じ、笑い返してくれた。その後記念に写真を一緒に撮った。教科書通りに上手く話せなくても、想いと表情で心は通じた。

言葉の壁がある人と想いを交わすことは、普段の生活では得られない喜びをもたらした。これを機に、言葉が通じる日常のコミュニケーションを顧みると、思いやりの気持ちが不足していることに気が付いた。自分の「きっと通じるだろう」との思い込みから

表現不足になり、相手に誤解を招いた失態はしばしば起こる。また相手に自分の表情がどのように見え、どのような感情を抱かせているのか。相手の立場に立ち意識したことがある人はどれほどいるのだろうか。言葉が通じる環境を当たり前だと思わずに、相手を思いやる気持ちを持つべきである。それは言葉が通じるか通じないかに関わらない。自分本位の意味疎通では、心から通じ合うことは出来ない。

また、ここから先は中国の良さについてだ。中国を訪れずに、中国に対して偏見を持っている友人に以下の経験を伝えたい。

私は大学1年生の冬に初めて中国を訪れた。三週間の語学研修プログラムだった。そこで帰国3日前に偶然出会った現地の大学生らが、私と友人をもてなしてくれた。彼らはスケートボードを楽しむ普通の大学生四人組だった。出会った日には火鍋をご馳走してくれ、スケートボードや言語の交流をした。翌日が私の誕生日だったので、盛大にお祝いしてくれた。最終日、ホテルまで見送りに来て、泣いて別れを惜しんでくれた。

これを私は滞在中に幸運にも偶然「良い中国人」と出会えたことによると考えている。勿論全ての中国人がこのように温かく対応してくれるとは思っていない。だが、日本人にだって同じことが言えるはずだ。全ての日本人が良い人か？親切か？自分が属している枠組みや自分の内側のゾーンはよく知っているのが安心し、より良く見える。だから異国に対して無理にプラスのイメージを持つ必要は無いけれど、外側に偏見を持たず真っ白な0の状態から向き合い始めることは大切なのではないだろうか。そうすることで自分の世界を広げることが出来る。●●人とは最初に生まれた地域によって区分しているだけで、皆一人の人間ということとは相違ない。中国人、日本人、アメリカ人と態々区分しなくても良いのではないかとさえ思う。一人一人違うからこそ関われば関わるほど新たに発見や刺激がある。

そして今回の大学生訪中団では、国家単位で日中の友好関係を推進していることを実感できた。日本にいる間は、正直友好関係が推進されている実感を得られたことは無かった。しかし現在ではその取り組みの一部にいられたこと、目標である3万人のうちの一人になったこと、大きな歴史的瞬間の渦中にいるということがとても嬉しい。だから今回訪中団に参加していない大学生にも是非チャレンジして欲しい。そして私は今後も、外国を自分の目で見て、触れて、感じる姿勢を大切にするとつもりだ。

「印象の変化」 稲嶋 葵

私は、今回の訪中団で初めて中国を訪問しました。4泊5日の中であらゆる場所を訪問し、知識を吸収し、経験をさせていただきましたが、どの場所でも、土地の使い方に驚きました。まず、今回訪問した地区はほとんどの道路が片道三車線以上で、きれいに舗装されていました。一つ一つの車線や歩道、高速道路も日本より広く大きく感じました。道路の両側にあるビルも高くそびえたち、ガラス張りのビルやデザイン性の高いビルが多く、暗くなるとライトアップされ、想像を超える経済成長でした。また、日本の25倍の国土を持つだけあり、ビルとビルの間が広く、私は、中国に対して閉鎖的なイメージを持っていたため大きなギャップを感じました。しかし、路上販売や観光客への物売りなど中心地と郊外では経済格差が大きくみられるようでした。

今回の訪中団に参加する決め手となった北京城市学院への訪問と中日青少年友好交流大会の参加もまた、私の中国、中国人への印象を大きく変えさせてくれるものとなりました。訪中前までは、中国はどこも汚いだとか、中国人はみんな気が強いというように、中国や中国人に対して否定的な印象を持っていました。しかし、北京城市学院は広い庭、大きな校舎を持っており、とても綺麗な空間で驚きました。また、中日青少年友好交流大会が行われた人民大会堂は言うまでもなく広く綺麗で、華やかな空間で、とても感動しました。交流大会が終わりバスに戻るころに、中国人学生が日本語で話しかけてくれました。中国語が全くしゃべれない私とは違い、日本語を流暢に扱っており、いつから勉強しているのか。と聞いたら、9月からだ。というので本当に驚きました。ものの3か月で会話ができるほどになっており、その姿に関心、刺激を受け、やる気を芽生えさせられました。また、私は日本語が下手だ。とも言っており、とても謙虚で、ここでも中国人への印象が大きく変わりました。

今回の訪中で、中国が思っていた印象と異なった点、思っていた通りだった点を発見することができました。共産党の印象が強く、日本に対して否定的で毛嫌いされているイメージを持っていたからこそ、その国民性を体感できると期待していました。しかし、私たちに話しかけてくれた中国人学生がいたように、日本に対して興味を持ってくれ、向学心を持っていてくれる人がいることを知り、中国人に対しての壁や先入観が薄くなりました。政治的歴史の中で色々な出来事があったため、簡単には友好関係が

円満に行くことは難しいとは思いますが、隣国隣人で、文化が似ている民族だからこそ理解できることが多くあると思います。政治的に難しいのならば、まず、国民同士が友好を深めることが大切だと感じました。この変心の一方で、路上販売や物売りなどに対しては思った通りで、中国の更なる発展を期待します。また、知り合いがいない中で訪中団に参加したため、日本人学生ともよい出会いができました。5日間という短い期間でしたが、様々な環境で育ち、考えを持った人と、母国ではない国で共に何かを得よう考えながら過ごしたことは、一生の思い出、将来の自分への大きな糧となりました。

今回の訪中では、5日間には感じられないほど多くのものに触れ、体験し、実感することができた濃い経験となりました。大学生というこれからが期待できる年頃にこのような貴重な体験ができ、両親、学校、(公益社団法人)日中友好協会に感謝します。今後、中国だけでなく様々な国や地域、考え方、物事に対して、偏見を持たず生活していこうと思いました。

「訪中団を通じて得た価値観」 太田詠梨

12月20日から24日までの4泊5日で行った訪中団は、私に多くの刺激を与えてくれました。

私は今まで中国に行ったことがなく、知っていることといえばニュースから得られる情報と、今まで学校で習ってきた歴史的な知識だけでした。知っていることは限られていましたが、近年経済成長の著しい中国には前々から関心はありました。私が中国に抱いている印象の中では、特に政治的な面での日中の不仲なイメージが強かったのですが、その国に住む人たちは必ずしもお互いの国を嫌っているわけではないと思います。過去の出来事に直接的な関わりがない若者や学生ならなおさらではないでしょうか。ニュースやネットでは伝えられない、中国人の"リアル"を感じ、そして触れ合ってみたいと思い今回参加させていただきました。

また、参加した理由としてはもう一点、日本人が描く中国人と実際の中国人との差異やギャップを発見してみたかったというのがあります。これはグループのミーティングでも多く出た意見であり、それだけ中国人について知りたいと思う人々が多いのだと思いました。私個人としては「爆買い」のイメージが強い中国人ですが、彼らが普段どのように行動しているのかとても気になりました。

中国に着いたとき、まず一番はじめに驚いたのが寒さです。飛行機から出た瞬間に白い息が出てびっくりしました。今年の日本が暖冬というもあるかもしれませんが、それでも氷点下の寒さがまさかここまでとは思わなかったのも、それだけでも異国に来たのだという実感が持てました。所々に雪が積もっている光景も滞在中見る機会が多く、何日も雪が解けないくらい冷えているのだと目でも分かりました。

中国に行った際、天壇公園や故宮博物院、天安門広場などといった場所に行けてとても嬉しかったです。実際に見るとやはり写真とは全然違って、その場の空気感や迫力などが直に伝わってきました。その中でも特に印象に残ったのは万里の長城に登ったことです。今まで教科書でしか見たことのなかった場所を実際に目で見て肌で感じて、足を踏み入れることができたのはとても貴重な経験となりました。実際に登った万里の長城は外見よりもずっとハードで、終始息を切らしながら階段を上がりました。途中で様々な国の人が階段で休憩しているのを見て、やはり万里の長城は世界的な遺産なのだとな身をもって実感しました。また、万里の長城を登っている道中、景色を見渡すことのできる踊り場で中国人の団体と鉢合わせました。景色を背景に写真を撮りたいことを察してくれて快く場所を譲ってくれただけでなく、少し会話をした後みんなで写真を撮ることができました。とてもフレンドリーに接してくれて嬉しかったです。

他にもホテルの近くで班のメンバーと集まって写真を撮る際、通りすがりの中国人の男性に声を掛けてお願いしたところ笑顔で応じてくれたこともとても印象的でした。「謝謝」とお礼を言うと「不客气」とグッドポーズを添えながら返してくれるとても良い方でした。

以上が私の中国での経験になります。出会った中国人の方は、皆さんとても優しく暖かかったです。日中間での冷えが懸念されている昨今ですが、一人一人に焦点を当てて見ると将来はそんなに暗いものではないのではないかと思います。国単位ではなくもっと個人でのコミュニケーションを意識し、これから積極的に他の国の人たちとも話してみたいと思える体験になりました。

「訪中を終えて考えたこと」 菊地里帆子

你们所多的是生力。20 歳の節目を迎えたこの年に訪中出来て本当に良かったと思っています。今回の訪中に際し、模索する中でも礎は積み上がっていることを知りました。まだ芽が出たばかり、生きていく上での元気が漲っている自分に出会えたことを幸運に思います。

初めて中国に興味を持ったのは、中学の教科書で魯迅の『藤野先生』を読んだときだと記憶しています。私は宮城出身のため、東北大学に在学していた彼は身近でした。『藤野先生』では、日本人学生の外国に対する考え方が今とは大きく異なりショックを受けました。しかしそれでも魯迅の学習意思に感動したことは鮮明に覚えています。海外で専門分野を学ぶという難儀を為し、異文化が受容されにくい環境下でペンを握っていたことに今でも深く敬意を払います。私は東日本大震災で被災をしましたが、世界から届く支援のおかげで再び勉強に向き合うことができました。当時中国からも多くの助けをいただき、中国の緑色の鉛筆も使ったのを覚えています。

青年又何須寻那

挂着金字招牌的导师呢？

不如寻朋友，

联合起来，

同向着似乎可以生存的方向走。

你们所多的是生力，

遇见深林，可以辟成平地的，

遇见旷野，可以栽种树木的，

遇见沙漠，可以开掘井泉的。

これは企業見学で目にした魯迅の言葉です。中国は多くの情報に溢れていて、それでいて長い歴史の揺るがぬ美しさがある、介在した場所でした。広大な中に確かな存在感を放つ天安門、故宮博物院に足を踏み入れた瞬間の厳かで静謐な雰囲気や、高く聳え立つ万里の長城、色鮮やかで燦然とした天壇。日本よりラフで現代的な企業。想像も出来ぬほど長い歴史の中で着実に時代の美しさを象徴するものが作られていて、目まぐるしく発展する現代も然り最先端のものが存在すると気付かされた一週間でした。それはいくら日本で勉強しても集められない知識たちで、現地に行って初めて触れた中国の「今」だったと思います。同時に、人民大会堂に集まった千人の一人であると実感したとき、自分もその流れの速い時代の中に生きてると突き付けられました。私には飛びぬけた才能はありません。歴史に名を残したいとも思っていません。しかし今回名もなき人々の努力の積み重ねでできた素晴らしいものに涙した経験を活かしたいとは思っています。被災した際、現地にいるひとにしか汲み取れないニーズがあると思っていたことを思い出しました。自分の目で見る現実に含まれていた情報量に圧倒されました。勿論歴史は複雑ですから、すぐ全ての人と友好的になろうなんて綺麗事であり机上の空論にすぎません。専門家ではないのですべて正しい情報を述べるのは難しいと思います。ただ折角情報社会に生きているのですから、正しいか否かに関わらず多くの情報に触れて少しでも多くの知識を持って日中の人々に関わっていきたいです。小さな積み重ねで緩和できる歪みがあるならば大きなことを成し遂げなくても良い、私の小さな言動が10年後の日中関係の一部になる努力をしたいと思います。100年先1000年先の何かになればという希望もありますが、自分が生きて自分が見届けて自分が責任を持てる時代のきっかけ作りができれば幸いです。

模倣し誰かについていくのではなく、生きる道に頭を悩ませることができる友人を今後も大切にしたいと思えた有意義な機会でした。付け焼刃ではいけない、木偶の坊になっている暇はない。秀でたものがないと嘆くより、ペンを持ち足を運び自分の才能を自分で選択し構築する。砂漠で共に井戸を掘ってくれるようなそんな友と未来を変えたい。日本人のように謙虚に奥ゆかしく、中国人のように意志強く志高く、魯迅のように創造を重んじ、そして個としては調和がとれる、そんな人間になりたいです。異文化に身を投じて自分のアイデンティティは日本人であることを痛感しました。どこまで行っても日本人なら、日本人としてできることに尽力したいと思います。

最後に、今回の訪中で一番の収穫は実りある出会いがあったことです。中国に関心があり、現地に足を運ぶ意思があり、さらに自分の目で見る現実重点を置いている貴重な友人たちができたことが本当に嬉しく誇りに思います。同じ温度で同じものを見聞きし、共有できた時間は何にも代えがたいものです。現地で多くの解説をしてくださった岡崎理事長をはじめ、今訪中でお

世話になった皆さんに感謝をするとともに、深夜まで多くのことを語り合った友人たちの健闘を祈ります。

良い成人のスタートとなった訪中で出会えた皆さんへの感謝をここで記します。ありがとうございました。

「百聞不如一见(百聞は一見に如かず)」 黒須朝陽

今回、日本青少年代表団友好協会分団に選んでいただき、日本国内の多くの大学生の方々と一緒に中国を訪問するというとても貴重な体験をさせていただきありがとうございました。まず研修では、それぞれの応募目的や訪中に期待することを各班で話し合い、発表しました。志望動機が多かったものは、自分自身の目で中国を見て、自分の肌で中国を感じたいというものでした。また、訪中に期待することでは、本当の中国は自分たちが思い込んでいるほどマナーが悪いのか、いや親切な人もいるのであろう、美味しいものもあるのであろう、美しい観光地もあるのであろうなどというものでした。北京に到着してまず感じたのは、空港の設備が日本と変わらないくらい整っていて、ホテルの部屋も小綺麗で殆どの学生が良い印象を持ったことと思います。フロントの対応も良く、私がこれまでに身につけた中国語を使って会話をすることができました。北京城市学院航天城キャンパスや歓迎会では中国人の大学生と交流することができました。歓迎会で隣に座っていた学生は、日本のアニメーションに大変興味を持っていて、それがきっかけで日本語の学習を始めたと話していました。彼はとても礼儀正しく、私はかつて京都に来ている中国人のマナーが悪いという報道を見たことがあるので、中国人も日本人もお国柄ということではなく、人柄であるのだと強く思いました。私と一緒に訪中した日本の大学生の多くが同じように感じたのではないのでしょうか。百聞は一見に如かずという言葉は本場で、やはり自分がその国を知りたいと思ったら、自分の足で出かけてその国を自分自身で感じる事が大切だと感じました。また、国を問わず、大学生はどんな国でも大学生らしく、流行りの服や音楽などに興味を持ち、青春を謳歌していると感じ、日本と中国にかかわらず、やはり欧米や他のアジアの国などでもそれは同じであろうと私は広く思いを巡らせてみました。今回中国を訪問したことで、中国の文化や歴史に触れることができ、私の視野が広がったことはもちろん、日本国内各地の大学生の方々と中国について語り合うことができ、そういった機会も滅多にないことなのでとても貴重な時間でした。私個人としては、美味しい食べ物に期待して行ったのですが、期待を満たしてくれるものもあり、まだまだ中国の魅力は深いものと実感しました。また次の機会があれば、今度は中国の大学生ともしっかり上手な中国語で話をして、これからのお互いの国の未来について語り合えるように、これからも大学の授業を通して中国語の力を伸ばしたいと思います。そして、今回観光させていただいた経験をもとに、中国の歴史や文化について更に理解を深めたいと思います。このような貴重な体験をさせていただき、推薦をいただいた南山大学と公益社団法人日本中国友好協会に深く御礼申し上げます。

「訪中団を通して学んだこと」 坂内 茜

今回の訪中団を終えて、歴史を学ぶことの大切さとその土地の言語を介した異文化コミュニケーションの重要性を学ぶことができた。中国の歴史についての資料や文献を目にする機会はこれまでも多くあったが、数字ではなく実際にその土地を訪れ、歴史的建築を目の当たりにして、初めて歴史を体験することができたと感じた。それらは、自身が思っていた以上に広大で圧倒された。また、プログラム内で多くの交流や、講演を聞く中で、日本と中国との関係向上を目指して、これほど多くの人や企画が存在しているということを知った。そして、自分も日本人の持つ中国への漠然としたイメージを払拭し、中国を訪れる日本人を増やすことに貢献して、この素晴らしい建築物や料理を一度体験してもらいたいと思った。

次に中国語能力向上の必要性を感じた理由として行程 3 日目のお土産を買う機会があったときのことが挙げられる。そこで一人の店員の方が、海外からの観光客と英語で会話している場面を見て、対応や声色から少し冷たいな、という印象を持った。しかし、そこで売られていた置物がとてもきれいで、私は中国語で、祖母へのお土産にこれを考えていて、これはどのようなものでいくらなのかを聞いた。すると彼女は、この置物は自分で全てに一つ一つ絵を入れていること、絵にはそれぞれ意味が込められていることを笑顔で教えてくれた。そして私の祖母の好きなものを聞き、丁寧に絵の意味を教えてくれるながら、一緒に柄を選んでくれた。会計の際、さっきのお客さんにはこれらを全て英語で説明できなかった、あなたが中国語が分かって良かった、と言われ本当に勉強しておいて良かったと思うと同時に相づちだけでなく、自分の意見も相手に伝えられるようになりたいと強く思った。もし、

あの時勇気を出して話しかけていなければ、彼女がどんな人だったのか知ることもなく、会話も生まれなかった。自身のつたない中国語も相手は熱心に理解しようとしてくれ、結果素晴らしいお土産を祖母に持ち帰ることができた。この経験から、英語で必要な情報を得るためのコミュニケーションをとることはできるが、その人自身とコミュニケーションを取り、文化をより深く理解し、日本人に伝えるという目標のために中国語を学ぶことが必要不可欠だと感じた。また、日本人の中国語話者が英語に比べ圧倒的に少ない印象を受け、これからの時代に必要になることを実感した。今回は多くの中国語を耳にする機会があったのにもかかわらず、今回の多くを通訳されたものに頼ってしまった。話すその人の言葉をそのまま理解できるように努力していきたい。

さらに、今回の訪中団では様々な経緯で今回の訪中団に参加し、それぞれの目的に向かって頑張っている同年代の人々に出会うことができ、日本で日中友好のために活動している方々の話を聞くことができた。このことにより、中国語が話せるとこんなことができるのかという発見が多くあり、視野を広げられたことに加え、多くの刺激を受け、スピーチコンテストに対する意欲や、自分が今後何をすべきなのか、やりたいことにどれだけの語学力が必要なかを考える機会を得ることができた。

これらを踏まえ今後の取り組みとして、来月から台湾への一年間の留学を控えている。また、私の通う武蔵野大学には多くの中国人留学生がおり、また孔子学院もある。中国について知ろうと思えばいつでも動き出せる恵まれた状況にあったことをより理解することができた。それらを積極的に活用し、語学資格取得を目指すと共に、スピーチコンテストやその他の交流に対しても意欲的に参加し、情報を集め、経験を積んで今回素晴らしい経験ができたことに感謝し、日中友好に貢献できる人材になりたいと考える。

「友好関係を築くうえで必要なこと」 宍戸そのみ

五日間の初めての訪中を終えて、今まで持っていたイメージの変化や、これからの日中交流のあり方について私の中で考えの変化が多くあったと感じている。

まず、中国に対してのイメージである。訪中前、私は中国に対してそれほど悪いイメージを持ってはいなかった。良い面では、最近ではキャッシュレスが進んでいることや経済発展が進んで中国企業も躍進してきていること、また、世界遺産が多いなどのイメージを持っていた。悪い面としては、大気汚染が深刻なことに加え、日中の政治関係の問題が多くあるイメージを持っていた。実際に街を歩いてみると現金を使っている人は少なく、小さな屋台ですら QR コードでの決済が行われていたことには感心し、また、企業訪問を通して、双創改革によって顔認証や自由なワークスタイルを取り入れた新たな企業が成立してきていることが分かったが、これらの点は日本よりもはるかに進んだ技術もあり、ここまで発展しているとは非常に驚いた。

多くの気づきがあったが、私たちが見たのは北京市内のほんの一部の現状にすぎず、見聞きできたこともかなり限られていたため、大都市と北京以外の地方の差を感じることや政治の状況についてなどは実感することができなかったが、今まで持っていたイメージ像が実際どのようなものであるのかを肌で感じられたのはとても重要なことであったと思う。

これから日中の交流を推進していく中で、大切なことが二つあると今回の訪中を通して考えた。一つは、今までの固定観念やイメージを抜きにして交流してみることである。日本人の中には、中国に対してよい印象を持っている人は多くはないと私は感じている。その中に、実際に中国人と交流したり中国を訪れたりしたことのある人はどのくらいいるのだろうか。ただのイメージや見聞きしたことだけで偏見を持っているだけではないのだろうか。日中三万人交流を掲げているように、“隣国として知っているようで深く知らない国・中国”について、中国人や文化に更に身近に触れていくべきだと考えている。二つ目は、“中国”について知ることである。これは、中国の人口や面積、民族の数を覚えるという事ではない。もちろんこのような知識も大前提とはなるが、中国の歴史や物事の考え方、今の中国がどのように形成されてきたのかについて知ることが、政治の面でも真の友好関係を築くには必要であると思う。無知ほど恐ろしいものはなく、そこから誤解が生じ、すれ違いが起こることも十分に起こりうると考えられる。文化や習慣が違えば考えが異なることも当然であるため、友好関係を築いていくには相互理解が不可欠であり、日本を知ってもらうことも、中国の考え方を理解することも同時に行われていかなければならない。私自身も、これからもっと中国の様々な地域を訪れ、その文化の違いや民族の多様性について学ぶとともに、“中国”についてより深く知る努力をしていきたい。

五日間の訪中では、中国を知るには時間がかなり短かったことに加え、北京のみの訪問であったため経験できることがかなり限られていた。中国人学生と交流して関係を築くことがあまり十分ではなく、中国側の若者の日本に対する率直なイメージや想

いはどういったものであるのか、実際に経済発展や都市の開発の中でどのように人々の生活が変わってきたのか、など深く知ることはできなかつたと感じている。しかし、今回初めて中国を訪れて感じた上記の疑問や関心ごとについて、来年秋から計画している杭州への交換留学で研究する課題の決定にはとてもよいきっかけになったと思っている。

この他に、日本全国からの同じ大学生との交流も大変良い刺激となった。他大学で専門的に中国語を学ぶ人や自分より先輩の人と交流してみると、普段の授業の進め方や自分の勉強の仕方、中国語を学習することへの意識の高さが全く異なることや留学の目的がはっきりしている人が多いことに気づき、かなりの刺激を受けたのと同時に、焦りを感じるきっかけにもなった。今回の訪中団の中には国立大学や有名私立の学生も多く参加しており、私のモチベーションアップに大きくつながったと感じている。ここから更に努力して、様々な地域や民族の中国人と自分の力で交流できるようになりたいと心から思った。

「二回目の訪中から得たこと」 竹下 大喜

私は12月19日から24日まで日本の大学を代表して北京を訪問した。今回の訪中団に応募したのは、2年前に主催者が違うのだが、大学生訪中団のメンバーとして初めて中国へ行き、行くまでに持っていたイメージと違い衝撃を受けたことがきっかけだ。私は、中国へ行くまで、街中で中国人の様子を見ていたので、中国に対してあまりいい印象を持っていなかった。しかし、中国へ行き優しい人もまたいることに気がついた。当時は中国のことを全く知らずに行ってしまったので、学んでから再び行きたいと思い今回訪中団に応募した。

まず、訪中初日は、都内での事前研修から始まった。訪中に関する詳細の説明やチーム内での交流会等が行われた。そしてそのまま羽田空港から北京へ向かい、一日目が終わった。

二日目の午前、北京城市学院へ向かった。そこで私たちの班は書道を通して、北京城市学院の学生と交流した。書道自体は、小・中学校でも習っていて、書く字も「福」だけなので、簡単であると思っていました。しかし、日本と字体が異なるため、難しかったです。書道を通して、中国の文化に触れることができ良かったです。その後、北京で有名な歴史的施設の一つである「故宮」へ行った。故宮は世界遺産であり、紫禁城とも呼ばれている。明、清の歴代皇帝と皇后が暮らし、広大な中華帝国の中心となった場所が、そのまま故宮博物院となっている。建物のみならず、文化財も見ることができ、中国の歴史を少し学ぶことができた。夜は北京にあるホテルニューオータニで、私たちの歓迎会が行われた。そこでは、日本人学生と中国人学生がお互い出し物を披露しました。私たち東京都分団も「ふるさと」を歌いました。一方、中国人学生側は、ダンスや伝統的な踊りを披露してくれました。最後は、日中両学生で「世界に一つだけの花」を日本語と中国語で歌い、友好を深めることができよかったです。

三日目は、「万里の長城」へ行った。万里の長城は、北京北部を東から西へ、龍がはうように横たわる城である。総延長約2万kmもある。万里の長城は、2年前に行くことができなかった場所で楽しみにしていた。実際に行ってみて、歴史とダイナミックさを感じることができてよかったです。その後、「天壇公園」を訪れた。天壇は、明、清時代の皇帝が天を祭り、五穀豊穡を願い祭祀を行っていた場所である。2年前にも訪れたが、天壇公園で行われる親による子のお見合い会はいつ見ても驚くばかりである。

四日目は、中国で進むシェアオフィスを見学した。日本では、働き方改革が進められつつあるが、見学したオフィスのように、様々な会社が一緒のオフィスで働くような制度はまだまだ少なく、先進的であった。その後、中国の国会議事堂である「人民大会堂」へ行き、日中青少年友好交流大会（千人交流大会）に出席しました。会場は1万人を収容できる会議場である「万人礼堂」で行われた。この大会は、2017年の日中国交正常化45周年、2018年の日中平和友好条約締結40周年時にも開催された大会で、3年目になるようだ。今回は日中青少年交流促進年の事業の一つとしての位置付けではあるが、来年以降もこのような青少年交流は続けていくべきだと感じた。この大会では、日中の政府関係者や日中それぞれを代表する学生によるスピーチや日中それぞれが歌や少林寺拳法などを披露した。大会自体では、私は中国人学生とほとんど交流できなかったが、日中両学生がお互いのことを理解し合うきっかけになったはずである。最終日は、朝早くから空港へ向かい、帰路についた。

今回の訪中を通して、中国人民大学の学生と仲良くなれた。また、2年前の訪中で仲良くした北京大学の友人にも会うことはできなかったが、電話で2年前の話をしたり、オススメのお土産を教えてもらうなど、中国人と交流することができて嬉しかった。

2年前の訪中をきっかけに、中国のことをもっと知りたいと思い、就活終了後から孔子学院や自主的な勉強で中国語や文化について学び、2年前よりも理解を深めてから訪中したことで、より中国のことをよく見ることができた。今後は、国内で日中のみならず、異文化交流や多文化共生がさらに進むようにアプローチしていきたい。最後にこの場を借りて、訪中前後に大変お世話になりました東京都日中友好協会様や武蔵野大学国際課様に感謝申し上げます。

「知ろうとする姿勢からスタートする」 野口裕太

北京へ行く前まで距離は近いがどこか遠く感じる国、なんとなく怖いベールに包まれた国。そのようなイメージを持っていた。帰国した今、中国へのイメージが大きく変わり中国のことを受け入れることができるようになったかという点とそういう訳ではない。ただ少なくとも中国の人々のことは以前よりも好きになったし、中国の文化も好きになった。

現代の社会ではSNSをはじめテレビや新聞に映し出される国家間の軋轢や国際的な問題を目にする。するとあたかもそれらの情報とその国の総意かのように見てしまう、一部を全部として捉えてしまうのだ。近年、移民問題や白人至上主義などの問題が取り沙汰される、これは多様性を受け入れられていないことの表れなのではないかと考える。現代の急速なグローバル化によってこれまでに無かったような人と人との混じり合いや文化と文化の混じり合いが起きる、それぞれの民族や文化に対して一人一人がキチンとした知識を持っているのであれば大きな軋轢は生まれなくても知れない。互いに互いのことを知ろうとし合う姿勢が大切になる。そんなことを思いながら北京へと向かった。

北京の人はなのか、中国の人はなのかはわからないが着いて早々仏頂面の人が多いと感じた。でもそれは日本人もそうだと思う。もちろん日本人も中国人も全員がそういう訳ではない。(かつさんなんてずっと笑顔の素敵な人だった) 仏頂面だとやっぱり話しかけにくいしなんとなく怖い。ただ、話しかけるとみんな親切で優しく、あれやこれやと私たちに尽くしてくれる。私がスーパーで買い物を終えて集合時間まで立って待っていると明らかにそのお店の人では無い人が「この椅子に座って休んでいて良いからね」とか「このお菓子食べなさい」とか言ってくれる。出発前の話で中国人は良くも悪くも臨機応変という話があったが本当にその通りである。

物事には裏と表がある。このような行動は積極的で小さいことを気にせず、周りの目を気にせずに自分の考えを主張出来るとも取れる一方で、言葉を変えれば自分勝手に凶々しい人とも取れるのだ。逆に日本人の行動も他人のことを考え、自分のことは後に回して周りの状況をよく見て行動出来るとも取れる一方で、他人の目ばかり気にして自分の考えを持っていない同調圧力に負ける人とも見ることもできる。正直中国で日本人的な性格で周りに合わせながら過ごしていくのは困難なことだと思う。自分はどうしたいのか?どう思っているのかということを表に出さなければならない状況がとても多く感じた。しかし、逆に中国人も日本に来た際に中国にいる時と同じようにお店や公共の場で振る舞えば、「態度の悪い人」や「自分勝手」と見られてしまうのだろうかと感じた。何が大切なのか?やはりそれぞれの文化を知り、理解し、尊重することなのだと思う。そうすればそこまで互いに驚かなくなるしそれぞれの事を認め合いながら生きていくことができるようになるのではないかとこの北京を通じて考えていた。でも、それらのことを考える上でネットだけの知識とか人に聞いただけの知識というのはほんの参考程度にしかならないのだという事をわかっておかなければならない。会ったことも行ったこともないものに対して先入観や憶測だけで判断することはとても危険で恐ろしい。自分自身で見聞きした経験を基に考えを巡らすのがやはり一番良いのだろう。少なくとも憶測で判断するよりは良いはずだ。

知らないものは怖いし不気味だ。知ることで恐怖はなくなり好きになる。まずは知るということから初めてみようと思う。ホテルニューオータニの歓迎会で中国と日本の学生の出し物を見ながら正直私たち学生は住む国が違えど何も変わらないと感じた。きっと同じ事で悩んでいるし、同じ事で笑い合っているし、同じ事で悲しむんだらうなと感じた、ただ少し互いのことを知らないだけなのだろうとそう思えた。

「予想を覆した訪中」 比嘉 駿

訪中した後中国に対する印象や考え方がものすごく大きく変わりました。訪中前の私は中華料理屋や街の雰囲気、匂いが苦手な印象がありませんでした。だからと言って中国が嫌いなわけではなく、中国人の留学生と出かけたりお話しすることは好きです。なのでこの訪中を機会に自分の中にあるフィルターを壊したいと思ったのが私の一番の目的でした。

一日目北京について時、ワクワクではなく言葉にすることができない緊張感を今でも覚えています。初めての中国というのもありすべてに緊張していましたが、良いところもある一方日本人の私には考えられない部分も訪中で体験することができました。この四日間で天安門広場、万里の長城を中心に様々な世界遺産または観光地に行くことができました。そこでは理事長やカツさ

んの話聞きながらなぜ建てられたのか、なぜこのような建てられ方をしているのかなど解説も含めながら観光することができ知識も増え、一段と深みのある観光となりました。その中でも印象的だったのが故宮博物館のレンガでできた地面の話です。敵に外からはもちろん地下から責められないように検査の通った硬いレンガだけが置かれているなど昔の人は情報もない中で知恵だけを絞り王を守るための対策を考えていることを知り感銘を受けました。また万里の長城も全長 4000km もあり上から見る景色は言葉にできないほど壮大な景色で昔の技術でこれを作ったかと考えるととても労力と人数が必要だなと感じました。いい経験だったと思いつつ訪中前の中国人のイメージそのままだったのが市場でのショッピングでした。私の友達が服を着た直後に中国人の店員が近づき無理やり購入をさせようとしてきました。帰ろうとすると服を引っ張ってきたり蹴ろうとしたのですがに我慢できず喧嘩をしてしまいました。結果として買わずに逃げましたが 2 万円だった服が 2000 円まで下がり店員が客に怒るという日本では考えられない態度や値引きの文化を体験できました。

中国はその国としての歴史が長く文化も日本とは違いました。一つだけ言えることは関わることでできた中国人は日本人との友好のためにすごく積極的また協力的だと感じました。訪中団体のために夜遅くに迎えに来て暖かく出迎えてくれたり人民大会をする会場での千人交流など私たちに貴重な体験をさせてくれたことまた毎年日本も友好のために中国に尽くし win-win な関係をお互いが理解していることを感じたとき中国のイメージが一転し今では良いイメージしかありません。このような機会を与えてくれたことに感謝し、社会人として海外と関わりのある仕事をする機会があるのでそこで中国と関わり様々な形で貢献できたいと思います。

「私の見た中国」 松下梨奈

私が今まで見ていた中国とは、テレビで報道されている政治や大気汚染、日本のパクリ製品など、マイナスイメージのものばかりで、そうした情報を目にするたびに中国に対する不信感が募っていき、知らず知らずのうちに中国とはこういう国なのだと勝手に決めつけてしまい、それ以上のことを知ろうとしていませんでした。しかし、大学に入ってから中国の留学生や中国の文化にかかわる機会が増え、メディアの情報だけではわからないことがたくさんあるのではないかと感じ、実際に中国を訪れてみたいという気持ちが強くなりました。そんな時にこの訪中団というものがあることを知り、このプログラムを通して、自分が思い描いている中国がどれほど変わるものなのか知ることができるといい機会になると感じました。実際に中国を訪れてみて最初に感じたことは、思ったよりも人が暖かいということでした。私は勝手ながら、中国の方に対して、自分勝手に主張が激しいというイメージを持っていました。しかし、向こうで私たちのことを迎えてくださった中国の方々はとても親切で、日本人と仲良くしたいという気持ちが伝わってきました。また、千人交流会が終わった後、「日本人ですか？仲良くしてください」と声をかけてくれた方がいました。私は終わった後に中国の方と交流するという考えすら持っていなかったため、その時は中国の方の積極性に驚かされました。それと同時にもっと中国語を話せるようになりたいとも思いました。話しかけてくれた中国の学生の方は、日本語を習い始めてまだ二か月だというのに、日本語で会話ができていました。私が中国語でも会話ができていたら、もっといろんなことを知ることができたのではないかと思います、非常に後悔しました。また、私はこれが初めての訪中ということもあって、北京の町並みや歴史的建造物に大変感動しました。私が思うに、中国の町並みは割と韓国に似ている気がしました。日本のようにビルや人でにぎわっているというわけではなく、程よく人がいて、程よく独特な形をしたビルが立ち並んでいるという印象でした。なかでも、カラフルな自転車はとても印象的で、北京の町並みには欠かせないものなのではないかというくらい、どこにいても貸し出し用の自転車が並んでいました。次に北京を訪れた際には乗ってみたいと思いました。

天安門広場や万里の長城、天壇公園などの中国の歴史的建造物を生で見ると、鳥肌が立ちました。建造物一つ一つにちゃんとした意味が込められていて、ただ美しいだけでなく、昔の人の思想が反映されていることによる中国らしさも感じました。

日本と中国は物理的にも思想的にも近い部分を持っているにもかかわらず、意外とそのことに私たち日本人も中国人も気づけていないのではないかと今回の訪中団を通して感じました。今回の訪中団で気づいた中国との共通点、良さ、私が見たありのままの中国を家族や友達にまず理解してほしいと思ったし、そこから友達や家族が中国に対して興味や関心を抱いてくれたらなお嬉しいと思いました。

私が今回訪中した理由は、10月から11月に内閣府の事業で初めて中国を訪問し、もっと中国について知りたいと思ったからである。以下、今回の訪中で感じたことを述べる。

1. 中国の市場としての可能性

私がこのことを感じたのは、企業訪問をした時だった。使われていない工場をリフォームし、オフィスや会議室にして、それらを貸すことでビジネスをしていると聞いて、おもしろいビジネスの形だと思った。また、その企業は北京市から補助金をもらっていると聞いて、国をあげて新たなビジネスを支援しているということが分かった。以前鄭州に訪れた際に、空港を中心に一つの街を作って経済区にするという施設を訪問したのだが、中国は国をあげてビジネスや産業を支援しているということが分かり、そのような取り組みが近年の急速な経済発展に繋がっているのだと実感した。北京にはたくさん的高層ビルがあり、また、オフィスの内装や、自販機がQRコードだったり、中に食材が入っていて注文すると自動で作ってくれる機会があったりと、今回の訪中を通じて中国の技術の発展を目の当たりにすることができた。

2. 団員との交流を通じた視野の広がり

今回の訪中は、4泊5日と短い期間だったが、同じ班の人や食事などが一緒になることが多かった同じバスの人達と仲良くなることができ、私自身のコミュニケーション力も上がったように思う。普段は他の大学の学生と交流する機会はなく、どうしても同じ大学の人とは似てしまうため、今回違うバックグラウンドを持っている学生と交流できたことは刺激的だった。特にみんな中国に関心があるということで参加したので、みんなのこれまでの中国との関わり方や、中国に対するイメージなどを聞くことは、大変ためになった。

3. 中国人の内面

私は10月から11月にかけて内閣府の事業に参加し、中国を訪問したのだが、その時に友達になった北京在住の中国人の大学生が、今回私が北京に行くということで、短い時間ではあったが、わざわざ市内からタクシーでホテルまで来てくれた。日本では、中国人はマナーがなっていないとか、自分勝手だとかいうイメージがあるように思えるが、実際はそのようなことはなく、むしろホスピタリティ精神は中国人の方があるのではないかと感じた。

4. 中国の悠久の歴史

今回故宮博物館や万里の長城を観光でき、ありきたりの言葉になってしまうが、中国の歴史を感じる事ができた。特に万里の長城はかねてから行きたいと思っていたため、大変うれしかった。万里の長城は秦の始皇帝が修復、繋げて完成させたと聞き、そんな昔に万里の長城を作った技術に驚き、自分がそのような昔に作られたものに立っているのかと思うと、不思議な気持ちでした。また、長城を築かないと騎馬民族があんなに急な山を越えてくるのかと思うと、大変驚いた。

中国の経済発展の側面も見つつ、観光も大いに楽しむことができ、とても有意義な訪中となった。最終日には日中友好促進年になんで、日中両国の大学生が一堂に会したとのことで、新しく2020年になってしまったが、これからの日中友好の継続を祈念するとともに、私もその一助となろうと決意した訪中であつた。

私が今回の訪中団に参加するにあたって期待することが大きく分けて2つありました。1つ目は全国から集まる大学生と仲良くなることです。普段の大学生活の中でこれだけの規模で大学生同士が交流する場というのはなかなか無いため、自分が今どんな大学生活を送っていてどれくらいのレベルにあるのかを客観的に理解するのにちょうど良い機会となりました。2つ目は中国に関して自分の体験を通じて知りたいということです。これは私の個人的な意見となりますが、日本のマスメディアを通じて得る中

国人の情報は良くないことが多い印象があります。実際に日本に来ている中国人観光客でマナーが悪い人を見かけたことがあります。しかし、日本政府観光局の訪日外国観光者数の 2019 年の累計の中国人観光客数の欄を見ると 8,884,100 人となっておりこれは 2018 年の中国の人口の 13 億 9000 万人から考えると約 7%とごく少数であることが分かります。このことから普段私たちが日本で見かける中国人だけで中国人を理解するのは早計であり、実際に中国に行って自分の目で確かめることで本当の中国というのが見えてくるのではないかと思います。

初日、私は若干緊張しながら研修会の会場に向かいましたが、班の人を含め事務局の方々など全ての人がフレンドリーだったので人見知りな私もすぐに打ち解けることができました。日中友好の前に日日友好というように多くの他大学の学生と仲良くなることができました。この日は夜遅くに北京に到着したため現地での活動は無かったですが北京の空港からバスに乗るときに自分が想像していたよりずっと空気が綺麗だったのがとても印象に残っています。二日目以降は文化体験、世界遺産の訪問、日中交流、企業見学などを行いました。北京城市学園では熱烈的な歓迎を受けた後、中国書道の文化体験をさせていただきました。中国の漢字は時代によって様々な種類の文字があり、今回私たちの班が体験したのは秦の始皇帝の時代の篆書という文字です。もうすぐ新年を迎えるということで「福」という字を書いたのですが普段見慣れない書体で書くのに苦労し、日本の漢字は中国から伝わってきたんだと実感することができた中国の文化体験でした。また、その後の日程ではよく世界史の教科書やニュースや映画で見ることが多い天安門広場と故宮博物院、万里の長城、天壇公園を訪れました。中国は全てのスケールが大きいので、どの世界遺産もたくさん歩き回ることができました。また、歴史的に貴重な建造物、彫刻、貯蔵物も多くあり、皇帝が住んでいた頃を思いながらみるとタイムスリップしたかのような気分になることができました。私が今回北京で一番感動したのが万里の長城です。「龍の背」と表現されることが多いですがまさにその通りで果てしなく続く道はまさに当時の始皇帝の絶対的な権力を如実に表していました。ISS から見える人工物としても有名ですが同じ地球人として誇らしくなるほど立派な建造物であり現代でこれほどの規模の建築を行うとなると難しそうでもありました。もう一つ印象的なのが日中大学生千人交流大会です。人民大会堂で行われるため招待状を使って正装で臨むのはとても緊張し、またとても良い経験になりました。日本人側の学生 500 人、中国側の学生 500 人が一同に集っていたのは今でも信じることができないくらいに凄いことでした。日本側と中国側が交互に練習してきたものを披露しているのを見ている中、心が温まってくるのが自分でも分かりました。

この 5 日間の訪中で私はたくさんの友達ことができました。皆それぞれ大学が違うし住んでいるところも違います。しかし日中友好という一つの目的の元に集まり出会い、行動を共にできたのはかけがいのない思い出です。私が最初に述べた訪中に期待することの中で自分のことを客観的にみるというものがありませんでしたが、皆、自分の好きなこと、興味のあることを全力で努力している人ばかりで私も後悔しないように自分らしく生きようとするきっかけとなりました。また、もう一つの訪中の目的である自分の体験を通じて知ることで中国の良さについて多くわかったかなと思います。具体的には中国人のおもてなしの心です。日本人には馴染みのある言葉であり海外にそのイメージはありませんが、到着の時の空港お出迎え、北京城市学院での歓迎、プレゼントなど細かい気配りを感じました。今回の訪中を通じて中国の食・文化・人の良さを実感したので日本でもまだ中国に行っていない人達に私がした体験を伝えることで間違った中国への偏見を無くし、距離的には近いけど心理的に遠い国から距離も心も全部近い国になれる手伝いができたらと思います。

「訪中の経験を将来どう活かしていくのか」 横澤魁人

中国から帰ってきて今日で 3 週間ほど経つが、今もあの赤と金が溢れる景色を思い出すことがある。それほど私にとって、訪中は衝撃的で前向きに将来を考え直す経験となった。中国に訪れる前の準備会で、自分は、「中国に対するステレオタイプな見方を持ってしまっている。この機会を通じて実際はどうかこの目で見て判断したい」と発表した。周りの学生も同じような意見を持っていた。そのステレオタイプとは、「衛生面の問題」や「貧富の格差」など、日々ニュースで見ると悪くなるような悪い面が強調された中国へのイメージ。最近、ネットを使っても興味のある情報以外が中々入らないようになり、そのイメージを崩せるような直接的な体験が必要だと考えたからだ。今回実際に訪れてみて、中国という国はその事前に予想していた中国のイメージを超えて自分の目の前に存在していた。訪中では、3000 年の歴史を背負う姿とまさに今発展して行っている中国の姿の両方を目にすることができた。特に後者で感じたのは、中国の圧倒的な基礎体力である。目を見張るほどの広い土地に、人がしっかりと生きていること。外国企業の店も少なく、経済を意識的に自国内で回しているのだと肌で感じた。それに伴う貧富の格差は確かにあるものの、一方で成長している業界はその分の勢いを持っていること。そこには、確かな目標へのイメージがあり国民全体が他の国より

同じ方向を向いていること。これは、自分もそうであるが何かと“出る杭は叩かれる”精神の日本人は目で見て我が振りを直した方が良いと感じた。同じ東アジアという括りの中で、ここまで自分がステレオタイプな方にはめてしまっていたことにショックを受けた。また、多くの日本人の学生と訪中できたことも、今回の訪中団でしかできなかったことであり、自分の中でも大きいことであった。一人で以上のことをおこなったとしても、それを確かめることはできず、一人の個人的な感想で終わってしまっていたと思う。共に体験していく仲間と話し合うことで、今感じていることの正しさや様々な目線、同時性を実感することができた。自分は将来、音楽業界に進み、文化発展という点で色々な国の人々と関わっていきたいと考えている。アジア圏では、その経済発展に呼応するかのように文化的な発展も目を見張るものがある。一方で中国では HIPHOP が禁止になり、規制の対象として捉えられることが多い。ただ規制が強くなってきている一方で、私が現地で見たとようなポテンシャルは確実に高まっており、規制に対する反発も芸術という高まりを押し上げていることもあるだろう。韓国のように産業として音楽業界を見直し、発展していく例もある。もしそうなった時に、中国に行く前の自分のようなステレオタイプな見方で中国を捉えているのは機運を見逃してしまうだろう。圧倒的な基礎体力を持っている中国だからこそ、すぐに変化、進化できるパワーを持っているからだ。今回の経験を、端的な情報として終わらせることなく、将来的に前向きに作用していくような経験として昇華させていきたいと思う。